

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 優秀賞

とびおりの

北星中学校二年

東 ひがし

史華 ふみか

気が付くと階段に腰かけていた。

ざわざわと葉が風で揺れる音が聞こえて、私は辺りを見渡した。鬱蒼と茂る木々に囲まれていた。薄暗い。目をこらしても上の方はよく分からなかった。

ふと苔の緑色が目に付いて、私はそつと撫でてみた。ひんやりする。なぜだか懐かしい感覚に襲われ、私は小さく笑った。

不意に、下の方から音がした。

「えいっ」というかけ声と、とん、と着地する音が繰り返し聞こえてくる。

退屈だった。私は腰を持ち上げ、とんとんと階段を下りていった。

そこには浴衣を纏った少女がいた。何となく、九歳ぐらいかなと思っ

た。背後の私に気付くことなく、三段目からとびおり、また戻り、という行動を繰り返していた。とびおる度に「えいっ」と呟くのが愛らしい。

私は階段に座って黙ってそれを見ていた。

十回繰り返したところで私は背中に尋ねた。

「何してるの？」

すると、彼女はぱつと振り返り、ぱちぱちと瞬きをした。髪だけじゃなくて目まで真っ黒だった。

しばらく私と彼女は見つめ合っていたが、やがて彼女が口を開いた。

「ここから抜け出したいの？」

へえ、と思った。私は身を乗り出した。

「そうすればここから出られるの？」

「さあ。わかんない」

でも、と彼女は前方を指差した。闇の中に真っ赤な鳥居が見えた。

「あそこからは出られないから」

だからとびおりてるの。彼女は終始無邪気だったが、内容は意味不明

だった。

怖いとは思わなかった。私は口を開いた。

「何でとびおりようと思ったの？」

「わかんない。でも、こうしたら出られる気がしたの」

彼女は名前を楓といった。いくつかと尋ねると、知らないと言ってきた。もう随分ここにいると。

「ここは暗いから嫌だよ…。早く父さんと母さんに会いたいよ」

隣に腰かけている楓はそう呟いた。今にも泣き出しそうな雰囲気だ。

手元の苔をむしりながら、楓はもう一度呟いた。

「抜け出したいよ」

涙目になっていた。その姿に既視感を覚える。

いつだったか、私もこんなふう泣いていたかもしれない。こんなふうに、音を出さないようにして階段に腰かけて静かに泣いていたかもしれない。

じっと見つめる私に気付いたのか、楓はぐいと目元を拭うと悲しい笑顔で笑った。

顔で笑った。

「お姉ちゃんは大丈夫？」

今度は楓がお話聞いてあげるね。

その声が合図だったかのように、私の意識は途切れた。

「××ちゃん、話を聞いてくれないか」

「××、聞いて…お願い」

聞きたくない。嫌だ。うるさい。黙れ。

何で母さんは…。

「お姉ちゃんだ」

楓がいた。嬉しいと悲しいが混ざったような顔で私を見上げていた。

私は黙って階段に腰かけた。楓が上がってきて私の隣に座った。

「約束だよ。お話、聞かせて」

丸い瞳をぼんやりと見つめながら、私はここは一体どこなんだろうと考えた。相変わらず薄暗く、どこまでも続く階段と、出られない鳥居と、楓。鳥居はあの時私も試してみたが、何か透明なモノがあつて、出られなかった。それに、鳥居の前に立った時、私は足場が全部無くなるような、そんな恐怖を感じて後ずさった。浅く呼吸をする私に楓がどうしたのと尋ねた。楓は感じないらしかった。

「お姉ちゃん」

袖を小さく引つ張られて私は我に返った。じつと見つめられて、私は不思議と口を開いていた。

父さんが好きだった。

かっこよくて大きくて強くて優しい父さんが好きだった。

父さんは漁師をしていた。腕がいいと評判で、毎回たくさんの魚をとって帰ってきた。

父さんは忙しかった。それでも休みの日には私と遊んでくれたし、母さんと買い物に行ったりもした。

父さんは母さんを愛していた。毎年、誕生日にはプレゼントを贈っていた。そしてまた母さんも父さんを愛していた。

その日は、漁で遠くに行っていた父さんが戻ってきた日で、近所の神社の夏祭りの日だった。私は紫色の浴衣を着ていた。

父さんに肩車してもらって、長い階段を上った。久し振りの父さんからは海水のおいがした。鼻の頭の皮が少しむけていた。父さんも久し振りに三人で行動できて、嬉しそうだった。母さんも笑顔だった。

屋台で綿飴を買ってもらった。私は綿飴が好きだった。ふわふわのそれを少しずつ手でちぎっては口に入れていた。

途中で、隣を歩いていた母さんが少し頂戴と手を差し出してきた。だ

から私はちよつとだけねと綿飴をちぎって口に入れてあげた。すると父さんが俺にもくれと言ったので、私は父さんの口の前に綿飴を差し出した。

「あっ」

ばくん、と父さんが大口を開けて、気が付いたら綿飴は無くなっていた。

無くなっちゃった…と切ない声で呟いた私に父さんは爆笑して、機嫌を悪くした私に頭を叩かれながら、ごめんごめんと新しい綿飴を二本買ってくれた。

両手に一本ずつ綿飴を持った私と父さんを母さんがカメラで撮ってくれた。

幸せだった。いつまでもこんな時間が続くと思っていたし、疑いもしなかった。

うとうとと始めた私に気が付いて、父さん達は帰り始めた。父さんにおんぶされて、綿飴の木の棒を両手に握りしめて、私は最後に鳥居を見て、それから目を閉じた。

翌朝、目が覚めると父さんはいなかった。

母さんに尋ねると、父さんはもう漁に行ってしまったという。

「この漁が終わったら長い休みに入るんだって。それまで元気にしてろよって言って海に出たわ」

帰って来たら遊園地にも行こっか。そう言っていたはずらっぽく笑う母さんに私も笑顔になった。

父さんは帰って来なかった。

「お父さんは死んじゃったの？」

「分からない。ただ、何の連絡も無いまま、他に船に乗っていた人も帰って来なかった」

しばらくして、どこか遠い海で、父さんの乗っていた船が見つかったと知らせが来た。

その船はびかぴかで、船内は無人大ったという。周辺を探してみても、船員は誰一人として見つけることができなかったそうだ。

「不思議だね」

「うん。それからさ、またしばらく経って：遠くで父さんの名前入りのハンカチが見つかったんだ」

そのびしょ濡れのハンカチは、確かに父のものだった。

海水が染みこんだそのハンカチは、今は仏壇の前にある。

仏壇の前で近所の人に支えられて泣き崩れる母の声を聞きながら、私も階段にうずくまって静かに泣いていた。

まだ死んだと決まったわけじゃない。もしかしたらどこかで生きているかもしれない。

「××にもらったハンカチ、失くしちゃったな」なんて言っただけで仲間と笑っているかもしれない。

そんなことは奇跡でも起こらない限り、ありえないことだと分かっていた。

「続き、話してよ」

楓に促されて、私は再び口を開いた。

五年が経ち、私は十四歳になった。

父さんがいなくなつた私達に、近所の人は優しく接してくれた。

その中に、中川さんという人がいた。

中川さんは父さんと仲の良かった男の人で、母さんとも仲が良かった。気さくで優しいおじさん、というのが私のイメージで、事実、中川さんはその通りの人だった。

中川さんは何やかんやと母さんを助けてくれていた。私はそんな中川さんを、すごく優しいんだなと思って見ていた。

そんなある日、私は母さんに呼び止められた。リビングに入ると、なぜか中川さんが固い表情で座っていた。嫌な予感がした。

「××、母さんね：中川さんと再婚しようと思うの」

ああやっぱ。私はどこかで納得していた。

「××ちゃん、僕はまだ未熟だけど、絶対君も、絵梨さんも、幸せにするよと約束する。あいつの：君の父さんの分まで。だから、」

中川さんが強い口調で言った。この人、真剣なんだな、と思った。真剣に母さんを愛していると。でも、素直にいいよとは言えなかった。

つまり、この人の善意は下心からくるものだったのだ。母さんが好きで、父さんがいなくなって悲しむ母さんにつけ込んで、ここまで話を進めたのだ。

そもそも、母さんは父さんを愛していたんじゃないやなかったのか。こんなに簡単に他の男に心奪われるぐらいの愛情だったのか。

「父さんが帰って来たらどうするの」  
その声が自分でも驚くくらい低くて、二人ははっとした後、悲しそうな顔をした。

「××ちゃん、君の父さんは、もう」

「認めないから！」

中川さんの言葉を怒鳴り声で遮った。

「父さんはまだ死んでないよ！絶対認めないから！」  
そう叫んでリビングの扉を思い切り閉めた。

こんなにどす黒い感情になるのは初めてだった。

「父さんがいなくなって寂しかったのは母さんも一緒なのにね」

「うん」

「本当はお姉ちゃんも分かっているんですよ」

「：うん。分かっているよ」

母さんは中川さんといるとすごく楽しそうだった。それに、母さんは毎日、仏壇に手を合わせて、父さんの写真を愛おしそうに撫でていた。

母さんは父さんを愛していて、中川さんのことも愛していたのだ。

「五年経ったんだね」

「うん…。分かってるんだ、本当は、私。父さんはもうこの世にいないってこと」

ただ、認めたら、父さんが本当に「故人」になってしまいそうで、違う人になってしまいそうで。そのまま、五年。死んだことを認められな  
いまま、こんな月日が経ってしまった。その間に私は中学生になり、  
母さんは中川さんと結婚を考えるようになった。

「母さんは前に進んでる。父さんが死んだことを受け止めて、立ち直つて、幸せになろうとしている」

「もうお姉ちゃんは大丈夫なんじゃない？」

楓がふわっと笑った。薄暗かったこの空間に光が差しこんでいた。

「楓」

遠くなる意識の中で、私は楓の名前を読んだ。分かっていた。楓の正体も、歪んだここがどこかも。

「バイバイお姉ちゃん。また今度ね」

私はずっと気付かないふりをしていただけなんだ。

母さんがいた。中川さんもいた。

「×××」

母さんが名前を呼んだ。私は黙ったまま母さんに近付いて、それから、泣いた。

本当は分かっているの父さんが死んだことも私が止まったままだったことも、母さんは中川さんが好きで父さんも好きで中川さんは全部受け入れてくれているってことも、私がワガママ言ってるだけっていうのも全部、全部。

涙と一緒に吐き出して、母さんの前に座りこんだ。

「ごめんね…ごめんね。いいよ、再婚。母さんが中川さんと一緒になつて、幸せになるんなら」

だって前約束したもんね、そう言っただけでぐちゃぐちゃの顔で中川さんを見る。中川さんが涙目で、だけどしつかりうなずいた。

「××、××で、…楓！」

久し振りに母さんが泣くところを見た。母さんはそのまま私を抱きしめて、かなり照れ臭かったけど、私はその腕の中でじっとしていた。私も進むんだ。

「お姉ちゃん」

楓が優しく笑った。光が満ちていた。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「ごめんね、楓」

この空間は、五年前に止まってしまった私が作り出した、あの日の空間。

そして、目の前にいる楓は、同じく五年前で止まってしまっていた私そのものだった。

「やっとなげ出せるよ。よかったね、お姉ちゃん」

「うん」

楓は、最初に出会った時と同じように、三段目に立って、くるっと振り返って、バイバイと手を振って、

とびおりの。

辺りに閃光が走って、私は思わず目を閉じた。

目を開けると、楓は、五年前の私はいなくなっていた。

私は階段の先にある鳥居を見た。また少し怖くなった。でもその感覚が、私に父さんを忘れていないということを確認させた。

死んだことを認めても、父さんは違う人にならなかった。父さんは父さんのまま、私達の思い出に生きている。

楓と同じように、私も三段目に立った。

ふと後ろを振り返ってみた。

光の中に、父さんが立っていた。  
あの笑顔で、あの腕で、私の背中を、  
「分かってる」  
とんと軽く押した。  
私はうなずき、もう一度前を見て、

——とびおりた。

